

ペルとハープ のお話

鈴木正子



あるところにペルという子どもがいました。ペルは山の中の小さなおうちに、おとうさんとおかあさんと三人でくらししておりました。

山のおうちは淋しくはなかったか？

そうそう。ペルにはたくさんのお友だちがいましたから、ちっともさびしくなんかありませんでした。山の中に住んでいる、お猿さんも、兎さんも、たぬきさんも、熊さんも、りすさんも小鳥さんもみんなペルのお友だちでした。

ペルはうたをうたうことがとても好きでしたから、山のお友だちによくうたを聞かせてあげました。お友だちはペルのうたを聞くのをたのしみに毎日毎日やって来ました。

ある暖かい日のことでした。みんなは野原にピクニックに出かけました。野原につくと、みんなは手をパチパチとたたいてペルのまわりにあつまりました。今日もペルのうたが聞けるのです。おふんのようにふかふかな草の上になんがさわると、ペルはきらきら光る空のお日様にも聞こえるようにと一生懸命うたいはじめました。きれいなペルの声は遠くの遠くの森の奥まで流れていききました。そのうちにいろいろなうたをたくさんうたったのでペルは少し疲れてきました。ころんとみどりの草の上に寝ころぶと、いつの間にか眠ってしまいました。お友だちもみんなみんな眠ってしまいました。そしてどのくらいたったでしょう。ペルは「ペル、ペル」というだれかが呼ぶ声で眼をさしました。

ベルが細く眼をあけてみますと、それはおかあさんのようでした。ベルはおどろいてとび起きると「なあにお母さん」とさげびました。でもね、それはおかあさんじゃあなかったのです。それはおかあさんのように、やさしい顔の女神さまだったので。

女神さまはにつこりお笑いになると他のお友だちを起さないように小さい声で

「ベル、ベルはほんとうにうたが上手ですね。いつも私も聞いておりましたよ、今日は、ごほうびにいいものをあげましょう。この白い羽根をもってあそこに見える森にいつてごらん下さい。そして森の番人にこの羽根をおみせ下さい」とおっしゃいました。ベルは白い羽根を神さまからいただくのを帽子にさしました。

「ありがとうございます、いつてまいります」ベルはざつそく、あの森に行ってみることにいたしました。すうすう、なんにも知らないで寝ているお友だちをおいて出かけることにいたしました。

「ちょっと森までいつて来ます」ベルはうさぎさんの耳にそうと手紙をはさむと元気よくあるきはじめました。

森はひるまでもうすぐらく、せいの高い木がぎっしり立ちならんで、それがおくの方までつづいていました。

もしも葉っぱと葉っぱの間から、やさしいお日様のひかりがちらちらこぼれていなかったなら、ベルは森のなかにはいつて行くのをやめてしまったでしょう。

いつまで行っても、どこまで行ってもベルは森の番人に会うこと

が出来ませんでした。ベルはいま来た道をひきかえそうかと、幾度もおもいました。くたびれたベルが木の株にこしをおろして、今度こそほんとうに帰ってしまおうと、思った時、急に後の方で「だれだ！　そこにいるのは」という大きな声がありました。

そして大きな眼をギョロギョロ光らせた大男が、「この森に来てはいけない。かえれ！　かえれ！」と雷のような大きな声で言いながら、ベルの前にたちふさがりました。

「ごめん下さい、ごめん下さい」ベルはこわくてこわくて逃げ出そうとしましたが、このひとがもしかすると番人も知れないと、じつとがまんして白い羽根をいそいで帽子からぬいてみせました。

大男は白い羽根をみると急におとなしくなつて、ベルの前にすわりました。やはり森の番人だったのでね。

大男は「よくいらっしやいました。少しおまち下さい」と言つてパンパンと大きな手をたたきました。するとどこからともなく、緑いろの服を着た森の精がおのをおかきで出て来ました。そしてその辺にある木をカーンカーンと伐り出しました。たちまちたくさんのお木が伐れました。大男がその木をけずるとたちまちきれいなハープがたくさん出来上りました。

「さあ、これが女神さまのくださるごほうびです。これからこれを持ってあの遠くに見える山に行くのです。あそこには三人のせんせいがいいてハープのひきかたを教えてください。このハープを弾いてうたをうたうと、もつともつとたのしく上手にうたえます」と言

いました。ベルは夢ではないかとおもいました。こんなすばらしい
ハープを弾いてうたがうたえるなんて。

「神さま どうもありがとう」

ベルが遠くの山に行く道を聞こうとしたとき、大男も森の精のすが
たも消えて、そこにはたくさんのハープが風に吹かれて、パラパ
ランときれいな音をたてているばかりでした。

「おのりなさいベル、おのりなさいベル」

耳をすませてよく聞くと、ハープはそう鳴っておりました。ベル
がそうと一番大きなハープにつかまると、ハープはそれをまっつ
いたように空にまいあがりました。あとのハープもベルにつづいて
次々に舞いあがると、遠くの山へむかっているとひはじめました。森も
野原も鳥も目の下に小さくなっていきました。

「はしれはしれハープ とべよとべよハープ」

ハープは鳥のようにヒコキのように遠くの山をさしてとびつづ
けました。

しばらく飛ぶとハープはひとつの高い山の上におりました。その
山にはきれいな赤い花がたくさん咲いておりました。花の奥から赤
い帽子をかぶって赤い服を着たひとが出て来ました。ベルは「あな
たが先生でしょうか。私はハープをおしえていただきにまいりまし
た」とごあいさつをいたしました。そのひとは「そうです。さあ私
のあとからついていらっしやい」と言いながらどんどん赤い花の間
をくぐってあるいて行きました。ベルは一生けんめいにあとをつい

て行きました。たくさんのハープはどこからともなく吹いて来た風
がはこんでくれました。

ひとつの谷を越えてしばらく行くと、青い花のたくさん咲いてい
る山につきました。青い花のかけから、青い帽子をかぶって青い服を
着た人が出て来ました。このひともせんせいでした。ベルと二人のせ
んせいは青い花の間をくぐりぬけて、またひとつの谷をこえました。
今度は白い花のたくさんさいている山につきました。白い帽子で
白い服をきたせんせいが出て来ました。ベルと三人のせんせいは白
い花の間をくぐりぬけてどんどんゆきました。

するとそこにひろいひろい、いろいろな色の花が咲いている庭が
ありました。三人の先生は庭の真中にたちどまるとはじめてベルを
ふりかえりました。風にはこばれて来たハープがもうそこにならな
くしていました。

赤い服の先生が一番さきにひとつのハープをとりあげて弾きまし
た。

リンロン リンロンとハープは鈴のような音で鳴りました。

青い服の先生が次のハープをとりあげてひきました。

パロン パロン パロンと玉をころがすような音をたてました。

白い服の先生が弾くとハープはヒューンヒューンと風のような音
をたてました。それは今までに聞いたこともないようなきれいな音
でした。

ベルは弾きかたでハープがいろいろな音をたてることを一番さき

に知りました。それから毎日毎日ベルは三人の先生におしえていた
だくことになりました。雨がふっても風が吹いてもベルは一日もお
けいこを休みませんでした。ベルはどんどん上手になって幾月か経
つうちには、どんな曲でもひけるようになりました。そのうちにハ
ープにあわせてうたをうたうことも出来るようになりました。

ベルはハープがよくひけるようになってくると、こんどは自分で
曲をつくってひいてみたくなってきました。その日もベルはハープ
をかかえて岩の上に腰をかけてそんなことを考えていました。

するとかわいい小鳥さんたちがそばの木にやって来てチロチロと
うたをうたいはじめました。そのうちに小鳥さんたちはいろいろな
声でなきながら、あっちの枝にとんだりこっちの枝にとんだりして
おにごっこをはじめました。ベルはだんだんたのしくなってきました。
そして小鳥さんのおにごっこをひいてみよう、とハープをとり
あげました。ハープが鳴りだすと小鳥さんはびびりして聞いてい
ましたが音楽にあわせておにごっこをはじめました。

「ランランラン タン ランランラン タンタン」というところを
ベルはつよくハープの糸をならしました。それは小鳥さんが枝から
枝へとぶとこです。いつまでもいつまでもベルはむちゅうで弾き
ました。

ふと気がつくといつのまにか夕方になっていました。小鳥さん
ちは「また明日ね、また明日ね」とおうちへかえって行きました。
いつのまにかうしろに三人のせんせいが立っていらっしやいまし

た。せんせいは

「とても小鳥さんのおにごっこがよくひけましたね、これからもつ
ともっといろいろな曲を自分でつくってごらん下さい」とほめてく
ださいました。ベルはとうとう音楽を自分でつくることも出来るよ
うになったのです。どんなにうれしかったことでしょう。

ベルはそれからいろいろな曲をつくっては弾きました。また曲に
あわせてうたのことも考えました。

川の流れているようす、高い山の上からたきのおちるようす、山
を風がわたって行くようす、すごいあらしや雨のこと、あたたかく
てらしてくださるお日様のこと、山になっている赤い実や花のこ
と、それはかぞえてもかぞえきれないくらいでした。川の流れる音
がよく弾けなくて足をすりむいたり、ころんだりしながら高いがけ
をおりて川のそばまで行ったこともありました。幾度も幾度も弾き
なおすので指がしびれて動かなくなったり、曲が出来あがるとベル
そんなくるしいこともありましたが、曲が出来あがるとベル

はそんなことはすっかり忘れてよろこびました。

ある晴れたしずかな日のことでした。その朝もベルは高い木の枝
に腰をかけてハープを弾いておりました。

はっぱさん

なんのおはなししているの

わたしにおしえてくださいいな

おみすましてよーくきげば

ベル おはよう

ベル おはよう

といつている

ベルは木の葉の風にゆれる音を聞きながらハーブを弾いてこんなうたをうたつておりました。いつのまにか三人の先生が木の下でそれを聞いていらっしやいました。しばらくして先生は木の上をみあげておっしやいました。

「ベル、おまえはもう先生がいらぬくらいよくひけるようになりました。今日は山の神様の所に行つて聞いていただくのですよ」

ベルは「はい」と言つてすぐに木からおりました。すると先生はベルがいつかはじめて山にやつて来た時のようにだまつてあるきはじめました。ベルはまたあの時のようについでいきました。どこからともなく吹いて来た風がまたあの時のようにハーブをはこんで行つてくれました。

しばらく行くとひとつの谷を越えた山の上にきれいなお城がみえて来ました。

「さあ来ました あそこです」

三人の先生はゆびをさして教えてくださいました。

「ありがとう せんせい」とベルが言った時ふしぎなことに三人のせんせいはもうそこにはいらっしやいませんでした。そして山の中いっばいに、赤や青や白い花がさきました。お城にゆくとき神様はもうベルの来るのを知つていてまつていらっしやいました。ベルは神

様をみてほんとうにおどろきました。

それはいつか野原でベルに白い羽根をくださった女神さまでしたから。

女神さまはベルのハーブとうたをお聞きになつてたいへんおよろこびになりました。そして早くかえつてお父さんやお母さんや山の動物さんたちに聞かせておあげなさいとおっしやいました。

「ありがとう女神さま! さようなら女神さま」

女神さまにさようならをしたベルがお城を出ると、たくさんハーブがもうそこならんでまつておりました。

「おのりなさいベル、おのりなさいベル」

とハーブは鳴つておりました。ベルがそうつとつかまるとまたハーブは空高くまいあがつてとびだしました。あとのハーブもつづいて次々ととびだしました。やがてベルの家のある山がみえてきました。ベルは「おーい おーい」と手をふりました。

山の家では森に行ったきりかえつて来ないのでみんなが心配していましたが、ベルが元気よくどつて来たのを見てたいへんよろこびました。おとうさんもお母さんも動物たちも。ベルは山であつたことをみんなに話してあげました。そしてハーブをひとつずつわけあげました。ベルが弾きかたをおしえると、みんなもすぐひけるようになりました。

それから毎日毎日ベルの山はきれいなハーブの音とベルのうたで、たのしい日がつづいたということです。

(おわり)